

最近、妹と風呂で遭遇するんですが……

ローリング・ビートル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

妹と風呂で遭遇するというタイトル通りの話です。

目次

最近、妹と風呂で遭遇するんですが……

最近、妹と風呂で遭遇するんですが……

最近、我が家ではおかしな事が起きている。

「どしたの、お兄ちゃん？」

「いや、何でもないよ」

妹の奏の声と、それに応える僕の声が、風呂場に反響する。そう、風呂場に。

目の前にいる奏は、当たり前だが裸で湯船に浸かっけていて、僕と向かい合う形で座っている。

そんな彼女は、濡れた長い黒髪をかき分け、小悪魔めいた笑みを向けてきた。

「もしかして妹の体に興奮してんの？」

「してない。するわけない」

「してる。この変態。ロリコン、シスコン」

「……いや、お前が間違っけて入ってきたんだろ。嫌なら少しくらい隠せよ。まったく……」

そう。最近風呂に入っていると、奏が間違っけて入ってくるのだ。しかも、慌てて引き返すような慎ましきはなく、そのまま体を洗い、湯船に入ってくる。

この事に関して、「まあ、兄妹なんだから別にいいじゃない」と母さんは言う。確かに僕は高校1年で奏は中学に上がったばかりだ。別に気にすることでもないかもしれない。でも……

「やっぱ見てんじゃん。エロ兄貴」

「違う。まったく興味ない」

我が妹は何というか……同級生の中ではそこそこスタイルがいいというか……あ、別に見てないよ？念のために反論しておきます。

とにかく、一緒に風呂に入るのはたまに気恥ずかしくなるというか、うっかり体が反応しちゃったら、この毒舌の妹から何を言われるかわからないとか……とにかく勘弁して欲しい。

「ふう……」

「お、おい……」

奏は何故かこつちに寄ってきて、僕の足の間に座り、体にもたれかかる。それと同時に、甘い香りが入浴剤の香りと混じり、心地良い気分……じゃなくて！

さすがにこの態勢は色々まずい。

「ほら、邪魔だよ。あっち行つた。しつ、しつ」

「ふんっ、嬉しいクセに。このムツツリスケベ」

小柄な体を押し返そうとすると、ぎばつと奏が立ち上がる。すると位置関係のせいで、小降りながらも肉付きのいい尻が目の前に来た。べ、別に見たかつた訳じゃない。

すると、奏がさつきよりも小悪魔の成分の増した笑みと共に、振り向きざまにこちらを見下ろしていた。

「変態。やつぱり見てんじやん」

「う、うるさいよ！僕もう上がるからな！」

これはもう自分が出て行くしかない。圧倒的に分が悪い。いや、気にしなければいいだけの話なんだけど。

僕は奏の視線を背中に感じながら、急いで風呂から退散した。

\*\*\*\*\*

次の日……。

「よし、奏が部屋で音楽聴いてるのは確認したし、母さんにもアイツが入ってこないように止めるよう頼んだし」

今日はしっかりと事前チェックをしたから大丈夫だろう。ようやく一人で風呂に入れる安心感を噛みしめながら、僕は浴室の扉を開いた……

「っ……だ、誰もいないよな、うん」

誰かいるような気配を感じたが、ただの疑心暗鬼だろう。そもそも漫画のキャラみたいなのに、気配を読む力とかないんだけど。家で一人きりの時に『出てこい』とか言つて、一人で恥ずかしい思いをしたくらいだし。

さつさと髪や体を洗い、湯船に浸かり、脚を伸ば……せない。あれ、何だ？これ……柔らかい何かが湯船の中に……。

すると、湯船から我が妹がぎばつと顔を出した。

当たり前のように、小悪魔めいた笑みと共に。

「はあっ!?お、お前、いつの間に……!」

「湯船で潜水してたら、お兄ちゃんが入ってきたんだけど。妹の入浴中に入ってくるとか、どんだけ変態なの?最低」

「いやいやいやいや、お前、さつき部屋で音楽聴いてたじゃんか!」

「ああ、あれはダミー人形だから」

「何でそんなの持ってたんだよ!」

「私の外出中や入浴中にお兄ちゃんが部屋に侵入して、下着を漁ったりしないように」

「しねえよ!妹の下着なんか興味ねえよ!」

「でも、ダミーちゃんを見たってことは、部屋に入ったんだよね」

「あ……いや、入ってないけど……こっそり確認しただけで……」

「ふうん……妹の部屋、こっそり覗いたんだあ?」

「え、いや……」

やばい。そんな意図は欠片もないのだが、状況だけ考えてみると、反論のしようがない。

しどろもどろになった僕を見た奏は、長い髪を湯船にふわふわ浮かせながら、さらに笑みを深めた。

「部屋の中こっそり見るなんて、どんだけ妹好きなの?シスコンなの?嬉し……じゃなくて、キモいよ」

「ん?今何か言い間違えなかったか?」

「気のせいでしょ。お兄ちゃんに部屋覗かれて嬉しいとかなるわけないじゃん」

「そ、そうか……確かに」

すると、いきなり勢いよく立ち上がった奏は、恥ずかしがる素振りも見せず、椅子を指さした。

その表情は、どこか焦っているようにも見えた。

「ああ、もう!さつきと背中流すからそこに座って!」

「い、いや、いいよ……ていうか、いきなり何?」

「い・い・か・ら!部屋覗いたこと、お母さんに言うよ?」

「あ、うん。わかった……」

本当に何故このタイミングで背中を？いや、今は黙って従おう。今の僕に拒否権などないのだから。

椅子に座ると、奏はボディウオツシユを使い、優しく背中をこすり始める。普段の言葉遣いの割に、こういった事は丁寧にやる奴だ。

ゴシゴシという小さな音以外、静寂の保たれた浴室。目を閉じ、心地よさに目を閉じていると、奏が声をかけてきた。

「ねえ、お兄ちゃん……」

「ん？」

「最近、彼女できた？」

「……いや、何で？」

「だって、女の子と一緒に帰ってるの何度か見たし」

「いや、あれはそんなんじゃないよ……」

「じゃあ、どんなの？」

「あの子、僕の友達が好きなんだよ。それで……」

「ふうん、よかったね」

「何が!？」

「だって、あの女の人……あんまお兄ちゃんに似合ってたなかつたし」

「……………」

「もしかして、気になってた？」

「別に……」

「ふうん」

いや、ぶっちゃけると……好きになりかけてました。思い出させないでくれよ……よかった、背中向けてる状態で。

「お兄ちゃん、今度の日曜日……デ……荷物持ちしてよ」

「何でだよ」

「失恋祝いにパフェ奢るよ？」

「祝うな。悲しめ」

「まあまあ、それに……」

「っ!？」

奏が背後からそっと抱きついてくる。

直に胸が当たる感触に、危うく変な声が出そうになったが、何とか

持ちこたえた。

「まあ、その……焦らなくていいじゃん？」

奏はこちらの心情などお構いなしに、甘えるような声音で話を続ける。

そこには何処か気遣うような優しさが滲んでいた。

「彼女できちやったら、こうして一緒にお風呂入れなくなるよ？」

「いや、別に入らなくてもいいんだけど……」

「うっさい。はい終わり」

奏は僕の背中にお湯をかけ、自分はさつさと湯船に入る。

その顔は、早くものぼせたのか、火照って見えた。

「……ありがとう」

「べ、別に……お礼なんていらないし！約束忘れないですよ！」

「はいはい。それともう風呂場で潜水すんなよ。紛らわしいから」

「は〜い」

この日のお風呂は、何がどうとかはわからないけど、何となく優しく感じられた。

この後二人で、小っちゃい頃のように100まで数えて、僕から先に上がった。

\*\*\*\*\*

次の日の夜……

「お前……入浴中の札かけてたのに入ってきたんだよ」

「見えなかったから」

「い、いや、そんな問題じゃ……」

見えないはずがない。しっかりとドアノブにかけたはずだ。

しかし、奏はいつも通り、俺の疑問などどうでもよさそうに椅子に座る。

「はいはい。じゃ、お兄ちゃん背中よろしく〜♪」

「は〜」

「昨日洗ってあげたでしょ？」

「あれは……」

「それとも、前も洗いたいの？この変態」



「……んなわけあるか！」

「顔真つ赤だよ」

「うるさいよ。やるからこっち向くな」

これ以上反論しても仕方ないので、奏の背中を流してやることにする。うっかり変な所に手が触れないよう、細心の注意を払わねば……。

まあ、こいつと話していると気が楽になるから、その辺はいいんだけど……最近、やけに本や映画や音楽の趣味も合うし。

てか、僕に彼女ができるまでこうするつもりなんだろうか。本気なんだろうか。

だとしたら……どうやらしばらくこんな日々が続きそうだ。

\*\*\*\*\*

「よし、お兄ちゃんの部屋の小説はこれで全部読んだ♪」

「……また胸が大っきい人のグラビア……うん、頑張ろう」